

《国際シンポジウム点描》

— 第三回国際天然物化学会議 —

湯 川 泰 秀

去る4月13日から1週間京都市岡崎の京都会館で天然物化学の国際シンポジウムが開かれた。これは IUPAC (純正・応用化学国際連合) の行事の一つである。IUPAC は2年に1度の国際会議のほか種々の分野のシンポジウムを開くが有機化学関係ではこれ一つで、第1回オーストラリア、第2回チェッコにつづいてこれが第3回である。

ここで天然物化学というのは動植物等の有機体の成分をとりだしてその構造を明らかにし合成するという有機化学が本来生れてた分野である。これは一面では天然にない新しい有機化合物の化学に発展し、また他面では生命現象の解明に関係する生化学につながるもので有機化学の正統であろう。応用面では医薬品、香料などに直結するが、染料はもちろん、合成繊維にしても石油化学にしてもこの古い歴史をもつ有機化学の豊かな経験の上に立って栄えているのである。

長井長義、真島利行、朝比奈泰彦などの諸先生を先駆者としてわが国の天然物化学の業績は世界に周ねく、その日本でしかも桜咲く四月京都で開かれるというので、海外からの参加者約320名、国内参加者約1,200名という盛会となり、ウッドワード、ウィーランド、プレローグなど世界の碩学の特別講演11を始め、約200の研究発表が行われた。このような大規模の国際シンポジウムはわが国空前であり、種々心配したもののまず大成功裡に終ることができた。

筆者は有機化学専攻といっても有機反応の研究が主で、二三の簡単な天然物の合成をやったにせよ、天然物化学が専門ではなく、華々しい学問的成果の解説はいずれ適当な方が述べられるから、運営のお手伝いをした一人としてどのように企画され運営されたかの一端を述べよう。

この国際シンポジウムが開かれる原動力となったのは日本化学会で昭和30年、小竹無二雄先生を中心に企画された天然物化学討論会が日本薬学会、日本農芸化学会との共催で毎年開かれていることである。スエーデンの有機化学の泰斗で親日家のエルトマン教授の肝いりで1960年のシンポジウムで第3回1964年は日本で開催のことが

きまり、東北大の中西香爾教授がこの報をもたらしたとき、理工農薬の各科が天然物化学討論会として一体となってこれを引受ける態勢になっていた。この人の和を得ていたことが今回の成功の主因である。

日本学術会議主催が本決まりになり組織委員会が動き出したのが1962年の春である。小竹先生を委員長に、東京では薬学の津田恭介先生を主班とし、京都では農学の武居三吉先生をかしらにして以後2年間毎月会合が重ねられた。経費は政府支出と寄付金を合せて約2,800万円であるが、これは製薬会社を始め各会社の絶大な御好意で予定通り運営できたことは誠に有難いことであった。

会場は京都会館、公会堂、勸業館という立派なものが安心であるが問題はホテルの予約である。前のオーストラリアでは国外参加は百数十人であるが日本ではどの位か見当がつかない。陽春の京都は国際観光客で一杯だから少くも1年前から予約しなければならない。とりあえず京都国際ホテルを大半予約しておいたのと日本交通公社の尽力で何とか切抜けることができたが、登録の日までホテルのやりくりには悩まされた。だいたい外国人ことにヨーロッパ人はホテルの予約をそんなに厳重にしなければならぬとは考えていない。何回か注意や問合せをしても講演者で予約していない人が40人位もある。日本に知己でもあればよいがベネズエラだの南欧諸国ではどうするのかと気がもめた。アメリカの某教授のように指定のホテルが満員ですと通知しても、折返しどうしてもそのホテルを予約してくれといってくるのもあれば、大阪空港の受付で予約してあるという京都のホテルの名前をいうが、聞いたこともないので電話で確かめると御休憩はこれこれという返事。バストイレ付日本式高級旅館にはちがいない。欧州で日本の某トラベルサービスが団体旅行を募ってきたのがあるが、例によって確定が直前なので大阪、京都は満員、やむなくミナミのキャバレー近くのホテルを予約しており、これが Sir Cocker からの手紙でわかり、そのやりくりは騒動である。

開会までの企画準備は東京で、会期中の会場と接待は京都で、プログラムは仙台でと分担が行われたが、三学

会ともなれば人材も集るもので適材適所これが一致協力した結果が参加者をして口々に **Well Organized** と賞讃させたのであろう。われわれに苦手な **ladies program** も満田久輝教授によってこれ以上望めないほど完ぺきなものとなり、レセプションでマリオン教授が夫人連の御機嫌がよいのでわれわれは会議に集中できたと答辞に述べられたほどである。

会期中以外の接待はしない方針であったが、京都へくるのに羽田で乗換えて大阪空港を利用する人が案外多い。調べてみると大阪空港には赤帽は1人もおらず、京都行バスは外人が見つかるのに困難であり、そのバスも日航京都終点は夜になると日本人でもタクシーがひろえない。オリンピックを旗印に温泉場の鉄筋ビル旅館は建つが外人が荷物をかかえてどうするだろうか。カセー航空などの着く大阪の国際線発着所（御存じない人が多いであろうが）は米軍のバラックの古手で、これほどお粗末な国際空港も珍らしい。こんなことで大阪空港での出迎いを引受けた。何日の何時に何人くるのか判らないから日航本社で予約調査をするとやはり夜の到着が多い。

ちょうど国際見本市もあって外人よろず相談所のようなことになったが、遠路やっとたどりついたといった人がほっとして喜んでくれるのを見るとつかれも忘れる。もっとも中にはそそつかしい学生アルバイトが神戸行のバスに乗せてしまった一幕もあり、またリネン教授が全日空でこられるというので多くの出迎えがありながら御本尊は日航で着いてわれわれの方にもこられず、30分以上迷子になったりした一幕もあった。

開会式は東京音楽大の宮城助教授一門による琴の演奏で始まり、小竹委員長の羽織袴姿の挨拶など純日本調で始まり、会の運営は当意即妙の英語の名手中西香爾教授によってあざやかに進行した。多くの講演や発表があり、ウッドロード教授がふぐ毒成分テトロドトキシンについて日本の業績をたたえたのを始め、日本からも多くの貢献が発表されたが、何よりの収穫は若い研究者たちがこれらの碩学のなまの講演に接し、またソシアルアワーで直接話し合う機会を得たことであろう。外人も皆満足して大喜びであったが、それにもましてわが国の研究者に大きい刺激があたえられた。

会期中にも予期しないことがおこるもので4日目の夜半、ステーションホテルの委員から女流化学者が急病で発熱したがどうしようかと電話がかかってくる。女性の室へ入るわけにも行かずはがゆい模様が察しられ、医師の手配や万全を期して接待委員長田中正三教授のお宅に電話して緊急の場合の京大入院をお願いする。翌朝快方に向

い、やれやれと思うと今度はフランスのW教授が42°C(?)の発熱だが、翌日帰仏のため医者をおよせつけないとのこと。下手な英語の電話で説得するがどうしても医者はいらぬといい張っている。これも翌日幸い熱が下がりホッとす。われわれは誠心誠意でやったのだが、外人は想像以上の親切だと感謝し、何故だろうかといった表情である。

アメリカのクラム教授夫妻と話しているときにもこの話題が出たが、ちょうど夫人が日本語の恩とは何かと質問した。それでわれわれは天地の恩、国の恩、父母の恩、衆生の恩を受けている。研究も先人の業績のおかげであり、これに感謝しなければならない。日本人は親切すぎるのでなく、これらの恩にこたえるため当然の務めをしているのですと説明したが判ってくれたかどうか。

閉会後もあちこちで講演会があり、また研究室へ連日お客が立寄ってくれる。白分が数カ月海外へ旅して誰彼と討論できたよるこびが、今度はいながらにして達せられたのである。国際シンポジウムはわれわれにとってたしかに労多きものであったが、やはり差引き得られたものの方が大きいことを確信する次第である。

(大阪大学産業科学研究所教授)